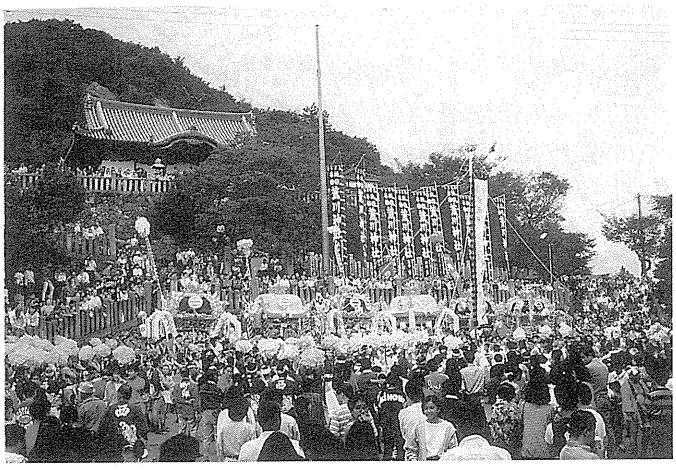
文化財見学シリーズ23　姫路市教育委員会文化部文化課（平成元年8月31日発行）
（平成13年1月31日三版）

『荒川地区』をたずねて

荒川地区は、夢前川の左岸、鬢櫛山から苫編山に至る荒川山塊の東にあり、夢前川の旧流路によって形成された三角州性氾濫平野、もしくは後背湿地上に位置している。西庄、土山、井ノ口、岡田、町坪、中地、玉手の各集落は、それぞれ氾濫平野の自然堤防を居住区とし、このうち岡田、中地、町坪、玉手は後背湿地との接点部を占めている。

玉手の南方1.5kmの今在家砂堆は、市川・夢前川による沖積平野形成の過程でつくられたもので、旧海岸線を示すものである。その時期については、条里遺構の分布などから、古墳・奈良時代には、すでに形成されていたと推定されている。当地区には、石ケ坪、五之坪、種坪、松ケ坪、町坪など、条里地割りを示す字名が残されているが、遺構は、近年の急激な開発によって消滅したものが多い。

明治22年、中地、玉手、町坪、苫編、井之口、岡田、西庄、土山の8ケ村を合わせ村制を布き、荒川神社の社名から荒川村とした。はじめ飾西郡、のち飾磨郡に属し、昭和11年に姫路市に合併した。



荒川神社秋祭り（小芋まつり）（写真提供、井ノ口、安守善弘氏）

▲**鬢櫛山**（国道2号線から）
『播磨国風土記』の匣丘に比定されている。船越山説もある。

荒川神社（井ノ口）　祭神は、水波能女神、手置帆負神、彦左知神。

祭祀由来については、もと加茂明神といって津田郷加茂村にあったという説、赤松満祐が山城国岡田郷加茂社より分霊を勧請し、のちに手置帆負神と水波能女神を遷し荒川明神とした説などがあるが、いずれも洪水による社殿流失説が記述されている。荒川地区は、岡田の八反長遺跡にみられるように、夢前川の旧流路による氾濫平野に立地するため、古くから度重なる洪水被害をうけてきたとみられ、水の主宰神・水波能女神を勧請、のちに村名となった荒川明神の社名が起ったものであろう。

拝殿正面の荒川神社額は、亀山雲平の書。天保7年（1836）銘の相撲図絵馬は、荒川宮相撲の名残り。明治以後の氏子参宮連による参宮絵馬が多数奉納されている。10月16・17日の秋祭り（現在は、もよりの日曜日）は、荒川の小芋まつりとして知られている。

荒川神社社額
（亀山雲平書）

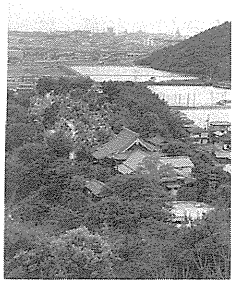
仏日山法輪寺（井ノ口）　臨済宗妙心寺派で本尊は行基作と伝えられる薬師如来。『播磨鑑』によると、宝林寺と書き赤松則祐の建立で寺領50石、のち英賀城主三木氏の崇敬をうけ、江戸時代には将軍家や姫路藩の保護を受けた。慶安２年（1649）より幕末に至るまで、９通の朱印状が下賜されている。天正８年（1580）羽柴秀吉が、英賀城攻略の途次、軽装で当寺に立寄り茶を所望したところ、白湯で接待され、「湯沢山茶くれん寺」の寺号を与えた伝承で知られている。

法　輪　寺

荒川村道路元標（井ノ口）　道路元標は、大正11年内務省令によって公布施行されたもので、高さ60cm。表面に、市町村道路元標の施刻がある。その位置については、大正９年兵庫県告示によって定められており、荒川村道路元標は、荒川村井ノ口寺ノ前38・39合併地となっている。

荒川村道路元標▶

船場別院本徳寺御山廟所（井ノ口）　船場本徳寺は、元和４年（1618）姫路城主本多忠政が、東本願寺13世宣如の願によって、旧池田家組屋敷跡を寄付して建てられたが、その後、本堂の再建によって本堂裏の廟所と墓地が狭くなり、宝永７年（1710）城主榊原政邦の寄付によって、井ノ口字済ケ岡に廟所が移された。通称、東の御山とよばれ、一般門信徒の墓塔も多数建立されている。

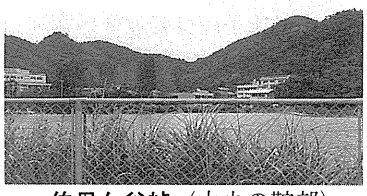

御山廟所（東の御山）

堂田・八反長遺跡　岡田集落の南東にあり、夢前川の旧流路によって形成された氾濫平野に位置する縄文時代後期から中世にかけての遺跡。昭和55年度以降、水尾川の改修工事にともなって実施された発掘調査によって、縄文式土器や石棒・打製石斧などが出土。貝塚からは土器と共に、ハマグリ・セタシジミなど13種類の海水産の貝類、シカ・イノシシ・カワウソなどの獣骨が検出された。石棒は折損しているが全長24.6cm、縄文晩期に限定できる石器で、宗教的呪術的な意味をもっていたものと考えられている。

八反長遺跡では、北から南へ、幅約20mの自然流路が発見され、杭・板状のものを使用した護岸工事の跡と、多様な木製品が検出された。なかでも湿田に使用する「大足」や丸木舟は、当時の荒川地区の水田状態を知るうえで、好材料であり、生活復元に重要な意味をもつ遺跡である。

堂田縄文土器
（今里幾次氏提供）

伯母ケ谷峠　おばがた峠とよばれ、荒川地区と東蒲田を結ぶ峠道。四ツ池から姫路高等技術専門学院の南を回り、若葉保育園前を西進、鞍部を越えると東蒲田の山所へ出る。東面は急坂、西面はゆるやかな峠道となっている。ほかに、西庄から東蒲田へ抜ける山田峠、苫編の西から東蒲田へ抜ける苫編峠がある。荒川地区と東蒲田地区は古くから峠道で結ばれ、人や物の交流が行なわれてきた。


伯母ケ谷峠（中央の鞍部）

付城山古墳群　苫編向山の東麓から、南へのびる尾根筋にかけて散在する古墳群。明治33年『古墳横穴及同時代遺物発見地名表』（東京帝大刊）に報告されているように、古くから知られた古墳群で、勾玉・管玉が出土したといわれている。県教委の『遺跡分布地図及び地名表』によれば、丘陵上に３基、東麓に５基が報告されており、いずれも古墳時代後期の横穴式石室古墳となっている。

付城山１号墳

付城山１号墳　姫路バイパスの夢前トンネル入口に近い山麓にある。南西に向って開口する片袖式の横穴石室で全長約７ｍ。封土は流失、玄室の天井石が落下しているが、ほぼ原形をとどめている。

付城山２号墳　１号墳の南西約50mの山腹にある。南東に開口し、全長約７ｍで封土は流失して３枚の天井石が露出している。奥壁は1.6×2.1mの１枚石、無袖式。極めて良好に保存されている。なお、丘陵上にも天井石の落下した１基がある。

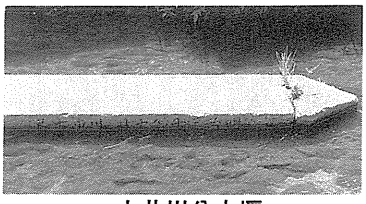
町坪五輪塔

町坪構居　領主は、英賀城三木氏の家臣で町之坪弾四郎主水佐。東西28間、南北26間の平城。天正８年（1580）秀吉の英賀城攻略によって落城した。町坪集落の中央にある本丸跡を中心に、堀跡が残されている。床浦稲荷の東にあった茶園堀は堀跡といわれている。構居跡の南西隅に五輪塔群がある。

室津道の常夜燈　町坪の用水路脇に建てられている。高さ2.13mで凝灰岩製。「慶応二丙寅五月立之　金毘羅大権現　願人為右衛門」とあり、基礎に「八十次　儀三良　惣助　豊次良　孫四良　永三良　清右ヱ門　源太夫　嘉右ヱ門　伊八良」と、世話人10名の名前が刻まれている。

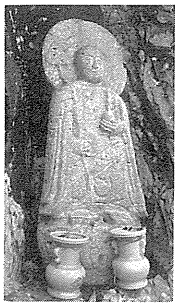
室津道の常夜燈▶

大井川分水堰　琴丘高校東、明治９年から20年以上にわたった大井川水論和解の分水堰。川下に向って左側側面に「明治三十年六月　川巾七尺」右側側面に「明治三十年六月　川巾三尺二寸」と施刻。長さ2.36m、巾36cmの舟型分水堰。土山地区と西庄地区に、７：３の割合で分水されている。以降、紛争防止のために地蔵講をつくり、監視機関とした。


大井川分水堰

土山地蔵石仏　水分け地蔵ともよばれ薬王山善宗寺の門前にある。正面に「地蔵大菩薩」、側面に「石工中村吉左衛門　世話人地蔵講中」とあり、明治30年９月、大井川の水利をめぐる紛争解決を記念して建立されたもの。解決の記録が内蔵されているといわれる。

西庄地蔵石仏　西庄集落の西の山腹、高さ10mほどの断崖の岩陰に置かれている。現高90cm、凝灰岩製の地蔵立像。左手に作り出しの宝珠を抱き、右手に錫杖をもつ。円形光背、仏身、蓮座を一石で彫成、側面に「貞治六季（1367）丁未十月日」「普為法界衆生願主□西敬白」の刻銘がある。姫路の地蔵石仏では、古いものの一つ。

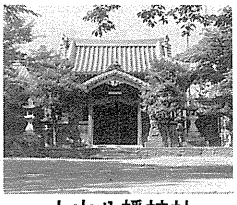

西庄の地蔵

水分け地蔵

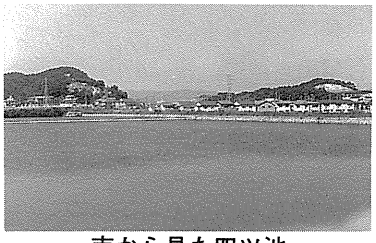
土山八幡神社（土山）　古くは築山八幡宮とよばれ、祭神は誉田別命・息長足姫命・姫大神。拝殿前の石燈籠は文化10年（1813）銘、当村氏子庄村若連中の寄進。境内の保存樹クスノキは周3.4m。

苔の清水（西庄）　善法山円正寺の境内にあり、赤松義村が定めた播磨十水の一つと伝えられている。

苔の清水

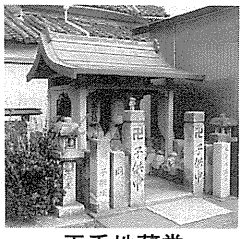

土山八幡神社

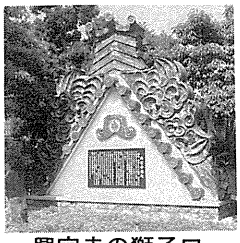
四ツ池　北から町坪池、玉手池、高町池（中池）、苫編池と並ぶ灌漑用水池。荒川地区は、夢前川の旧流路にあたる氾濫平野であったが、明暦元年（1655）姫路城主榊原忠次の夢前川付け替え工事によって、用水不足となり、しばしば水論がおこった。なかでも玉手、苫編、高町などは、用水不足が深刻で、このため四ツ池の用水が利用された。荒川地区には水に関係する地蔵さんが多い。


南から見た四ツ池

木村興宗寺（苫編）　境内には「万延二年　姫路瓦屋　佐四郎」銘の獅子口（高さ約３ｍ）が保存されている。江戸時代には、御所棟鬼板または御所鬼とよばれ、頂部に３本の経の巻と、胴部に綾筋とよばれる平行線が４本ついている。

玉手地蔵石仏　水守地蔵尊ともよばれ、もと千両塚の近くに安置されていたが、明治のはじめ現在地に移したといわれている。高さ約50cm、花崗岩製。地蔵堂横に、明治39年銘の御鷹野橋（現、玉手橋）の石材、無銘の力石が保存されている。すぐ南に湧水があり、現在でも生活用水に利用されている。


玉手地蔵堂


興宗寺の獅子口

大年神社（玉手）　拝殿に「祝凱旋」の扇形額が２面奉納されている。「明治39年午２月　征露紀念」と書かれ、漆喰製。姫路地方では他に例をみない珍しいもの。

玉手山善正寺（玉手）　真宗本願寺派、境内に「天明三年癸卯之天二月　播州姫路御城瓦工　大古瀬市左衛門信成作」の鬼瓦が保存されており、梵鐘には「享保十五年（1730）三月廿六日　朝来郡生野銀山　月橋山西岸寺」の銘がある。鐘楼新築時に購入したもの。

善正寺の鬼瓦

大年神社の額

■編集　木　谷　幸　夫
（姫路市文化財嘱託調査員）